



# 教職大学院 Newsletter No. 66

福井大学大学院 教育学研究科 教職開発専攻 since2008.4

2014.10.18

## 専門職の「ダブル・ループ・ラーニング」 — ボストンの「地」でめぐる「知」 —

福井大学教職大学院／准教授 木村 優

平成26年9月14日、福井大学教職大学院の同僚と共にアメリカの東海岸、歴史と最先端が調和した港町ボストンに降り立った。この時、私はたくさんのミッションを両手いっぱい抱えてボストン、その後、ニューヨークを訪問したのだが、実はそのミッションの一つに個人的に依頼を受けたある原稿の執筆があった。その原稿とは、「教師教育をリードする〈世界の10人〉」の一人、ドナルド・ショーンの実践と研究の紹介文を書く、というものだった。

ボストンで生まれ、マサチューセッツ工科大学で専門職の実践研究を推進したショーンについての紹介文を私がボストンの地にしながら執筆する。「なんて奇遇なんだろう」、「不思議だな」と思いながらも、私は光栄な気持ちを胸に納め、それからちょっと重くて厚みのある『省察的実践とは何か』（柳沢昌一・三輪建二 監訳、鳳書房）を鞆に忍ばせてボストンの街を歩いていた。これまでも、そして夏期集中講座でも院生のみなさんと何度も読み合ってきた『省察的実践とは何か』をボストンのホテルや移動の電車の中で改めて読みなおす。すると、琴線を震わせる一つの概念が目にとまる。「ダブル・ループ・ラーニング」である。今までも注目してきたのだが、今まで以上にこの概念の「光」を感覚する自分に気づき驚く。

「行為の中の省察」を行う実践者は、実践における「状況との対話」から学び、実践の「知」を生成し、その「知」を専門領域の学びと往還させながら理論検証と専門性開発に努める。この「ダブル・ループ・ラーニング」では、理論検証が絶えず実践の場で行われるため、自らの実践を統制している状況や環境を変える助けとなり、システム全体を通した「変化のさざ波」を生み出すとショーンは指摘する。「実践」と「理論」を切り離すのではなく、「実践」と「理論」双方を

ループすることで省察的な学習が成立するのである。

ある「理論」や「技術」を実践に「適用」すること、学びを専門領域の中だけで閉じる「シングル・ループ・ラーニング」、これらの限界と問題点は30年以上前にショーンによって看破された。だからこそ、「省察的実践」に従事する私たちは「理論」や「技術」の「適用」を超えて、実践の中に身を置きながら「ダブル・ループ・ラーニング」によって実践の中の「知」と「理論」と「技術」を生成していく必要がある。

それから、「省察的実践」には失敗や失態が常につきまとうものである。私自身も学校支援や教師教育という自らの実践の中で失敗し、申し訳ない気持ちを抱くことが幾度もある。しかし同時に、実践を省察し、試行錯誤するからこそ、「喜び」や「驚き」が私たちの前に顔を覗かせる。「直感的な行為から驚き、喜び、希望が生まれ、予期しなかったことが発生すると、私たちは行為の中の省察によってその事態に対応する」、ショーンはこう励ましてくれる。

ボストン・カレッジでは、光栄にも招待講演をさせていただき、E d.D. (教職博士)の聴き取り調査も併せて行った。また、平成27年2月末の福井ラウンドテーブル・シンポジウム「知識社会の学校と教師の資本」で講演いただくアンディ・ハーグリーブス教授とも親密な研究打ち合わせを行うことができた。さらに、ハーバード大学のE d.L.D. (教育リーダーシップ博士)事務所を訪問し、実務担当者への聴き取り調査も実現した。その後、ニューヨークでアメリカにおけるレッスン・スタディの展開を聴き取り、コロンビア大学ティーチャーズ・カレッジとの研究交流を行った。これらの活動と調査についてはニュースレター67号で詳しく報告したいと思う。

## スクールリーダーだより

### 福井市至民中学校／古市利明

福井市至民中学校は、今年度新築移転開校して7年目となりました。本校教育の特徴であり、生徒たちの学校生活の向上を支えていく3つの大きな柱である「異学年型クラスター制」「教科センター方式」「地域連携」を紹介します。

まず「異学年型クラスター制」です。生徒たちは、クラスターと呼ばれる5つの縦割り集団に分かれて、給食や掃除など日々の学校生活を、異学年で協力して過ごしています。クラスターでの生活を通して、生徒たちは自主的・自治的に活動することを学んでいきます。クラスターでの主な活動として3つあります。まずは団結旗づくりです。これまでもありましたが、今年度から新たな取り組みとして、美術部とクラスターの希望者が力を合わせて制作することになりました。団結旗には、各クラスターで考えたテーマや自分たちのクラスターを象徴するような絵が、ダイナミックに描かれています。5月から7月上旬までの約3か月間、放課後などの限られた時間の中で、各クラスター代表の生徒たちが、みんなの思いを受けてコツコツと制作活動に励みました。完成した団結旗は、葉っぱのエリアに飾られ、1年間生徒たちの成長を見守っています。

次は、合唱コンクールです。毎年3年生が中心となって練習を行い、下級生たちをリードしてくれています。特に、クラスター長やパートリーダーになった生徒たちにとって、この合唱コンクールの練習や本番までの活動は、リーダーとして成長するきっかけを与えてくれる場となります。合唱練習をどのように作りあげ、みんなの気持ちを盛り上げていくか。練習がなかなか思うように進まず、みんなの見えないところで涙を流すリーダーたち。しかし、仲間や教員たちの励ましにより、悩みや苦しみを乗り越え、笑顔でみんなの前で歌い続けている姿。また、本番ではクラスターみんなが完全燃焼し、達

成感を感じている様子など、毎年このクラスター対抗の合唱コンクールでは、様々な生徒たちのドラマを見ることができ、この短期間での生徒たちの成長やクラスターの団結力に驚かされています。

最後は学校祭です。至民中学校では学校祭の準備を各クラスターで行い、一人一人が応援団やパネル制作、ステージ発表などの部門と呼ばれる係に所属し、責任を持って自分の仕事を果たしていきます。特に3年生は毎年、後輩たちの先頭に立って企画運営し、各部門で学校祭成功に向けて取り組んでいきます。夏休みから準備を始め、1・2年生たちが仕事をしっかりと行うことができるように段取りを組んでくれます。毎年、これまでの2年間の経験を生かして、後輩たちを引っ張っていく3年生の姿が見られ、頼もしく思います。各クラスターが合唱コンクールの活動を通して一致団結し、その力が学校祭になっても発揮されています。至民中学校に来て3年目になりますが、このように学校行事を中心としたクラスターでの取り組みは、異学年での温かい絆をつくり、リーダーを育てていくことにつながっていると感じています。また、生徒たちの自己有用感を高めていくよい機会にもなっていると思います。さらに、昨年度からクラスターの活動は、学級や学年活動の土台として、生徒たちの日常活動を充実し、潤いのある学校にするための取り組みという考え方を教職員全員で共有しています。



次の2つ目の大きな柱は「教科センター方式」です。生徒たちが時間割に合わせて、「エリア」と呼ばれる各教科の専用教室がある場所に移動し、授業を受けるシステムです。エリアには、生徒たちの学習成果などの掲示物や各教科の資料が展示されるなど、エリアに入ればその教科の雰囲気や空間づくりを、各教科で工夫しています。さらにエリアには、「ステーション」と呼ば



れる教科ごとの職員室もあるため、生徒たちは休み時間などに教員に気軽に質問をしたり、昼休みには3年生を中心にミニ学習会が行われたりする様子も見られます。また、教科センター方式は、生徒たちだけでなく私たち教員にとってもプラスになっています。例えば、空き時間には、エリアで生活ノートを見ながら同じ教科教員の授業を遠くから見させてもらっています。授業の進め方や生徒たちの様子を見させていただくことで、自分の授業の参考にして学ばせてもらっています。さらに、休み時間や必要に応じて教科会を開いて、授業の進捗を確認したり、授業のアイデアを相談したりするなど、教員が日常的に協働で学び合うことができる空間を、教科センター方式はつくり出しています。今後も、この教科センター方式の特徴を生かしながら、私たち教員の授業力と生徒たちの学力（基礎基本、活用力、学習意欲）を向上する努力を積み重ねていきます。

最後の3つ目の柱は「地域連携」です。至民中学校の日々の教育活動を、ホームページやお便りなどで地域へ発信したり、スタンプラリー形式で地域のボランティア活動に参加したりするなど、積極的に地域と関わっているのが特徴です。そして、この地域連携に欠かせない存

在が「サポート至民」と呼ばれる、至民中学校を応援してくださっている地域の方々です。学校行事や地域の行事などに毎回協力していただき、生徒たちや私たち教職員を支えてくださっている大きな力となっています。また、昨年度からは教職員とサポート至民の方々との研修会を行っており、今年の夏休みも一緒に研修を行いました。教職員の小グループにサポート至民の方々に入ってもらい、1学期前半の生徒たちの成長や変化などの振り返りや9月以降の学校づくりを、私たち教職員とサポート至民の方々の視点から語り合うことができました。保護者とはまた違う視点で、至民中学校のこれからの成長のために率直なご意見をうかがうことができるので、今後もこのような研修会を大切にしていきたいし、他の学校にはない至民中学校ならではの取り組みだと実感しています。

至民中学校は、今後もこの3つの大きな柱を大切にしながら、生徒たちの学びと生活の向上を目指していきます。そのためにも、教職員だけでなく、多くの関係機関、地域、PTA、ボランティアなど、多くの方々との協働によるチームプレー、チームワークを行っていきたく思います。

## 福井県特別支援教育センター／船谷友代

### ◆福井県特別支援教育センターの業務

当センターは、障害のある子どもや特別な教育的ニーズのある子どもたち自身と、保護者や先生方、園や学校、地域を支える教育機関です。嶺北地区を当センターが、嶺南地区を嶺南教育事務所特別支援教育課が担当しています。

12名の所員が、福井地区、丹南地区、坂井・奥越・吉田地区の3地区に分かれて業務を行う地区体制をとっています。地域や園・学校の実情に合わせ、「教育相談」、「保護者支援」、「就学相談」、「研修支援」などの業務に取り組んでいます。

昨年度、当センターが受けた1歳児から高校3年生についての相談受理件数は1,100件を超え、延べ相談回数は、約7,900回でした。電話やメール、来所による相談もありますが、園・学校への訪問相談が多くを占めています。所員は、嶺北地区の小中学校のうち8割以上の学校にうかがい、授業中の子どもの様子を観察した上で支援会議等に参加しています。

また、園や学校を訪問した際には、特別支援教育コーディネーターや管理職の先生方と、ひとつの事例にとどまらず、学年や学校全体で共有できることは何か考えるようにしています。学級経営や授業づくりに、特別支援教育の視点を持ち込んでいくことが、インクルーシブな教育システム構築の1ピースであると考えます。



### ◆所員の力量形成の場

様々な相談や研修の業務にあたる所員が、組織として地域のニーズを把握しそれに応えていくために、当センターでは「学びの会」という場を設定し、所内の研究・

研修を行っています。

学びの会のメインは、所員一人一人が相談の一事例を取り上げ、所内全体で検討する事例研究です。平成23年度から、「園・学校支援」の視点で業務を展開しており、個々の相談事例を手掛かりにした、学級や園・学校全体へのはたらきかけの実践について取り上げています。所員が自らの実践を振り返って書き綴り、語り、周囲からの意見に耳を傾けます。また、他の所員の実践を読み、語りを聴き、自らのとらえを述べます。毎回、教職大学院の先生方にも参加していただき、少人数のグループで語り合ったり、全体で共有したりしています。週1回は、担当地区ごとに会議を設定し、職員室でも情報交換を行っているのが日常ですが、学びの会の場では、格段に思考が深まっていくことを感じます。書くことや、多様な視点が持ち込まれることで、一つのとらえに枝葉が広がります。また、一人で考え込んで広がります。

きた枝葉が適切な根拠をもって刈り込まれ、一つの方向性に導かれることもあります。

その他、所員の力量形成・向上を図り、県外での研修を受けた所員が研修内容を詳しく伝達しています。教育ITソリューションや授業のユニバーサルデザイン等の最新情報を得て、相談事例や出前研修での活用等について検討します。また、就学先の決定に関わる就学支援の事例についても、所員全員で検討する研修会を設定しています。少人数のグループで、個々の就学相談・調査の内容から教育的ニーズや教育環境、就学先を考えていきます。

このような所内での研究や研修をとおして組織の後押しを得ながら、ビジョンを明確にもち、日常の業務に向き合っています。

## 福井県教育庁嶺南教育事務所／加藤勝代

県の教育機関では、多様化する課題やベテラン教員の大量退職を受け、喫緊の課題である専門職としての教員の資質能力の向上に向けた具体的な取組が進められている。福井大学教職大学院の「拠点校」でもある嶺南教育事務所では、こうした近年の改革を踏まえ、今年度から研究体制の再編を行い、所内業務の見直し・改善に取り組んでいる。嶺南における「福井型18年教育」の更なる推進に取り組むため、4つの方針を定めている。

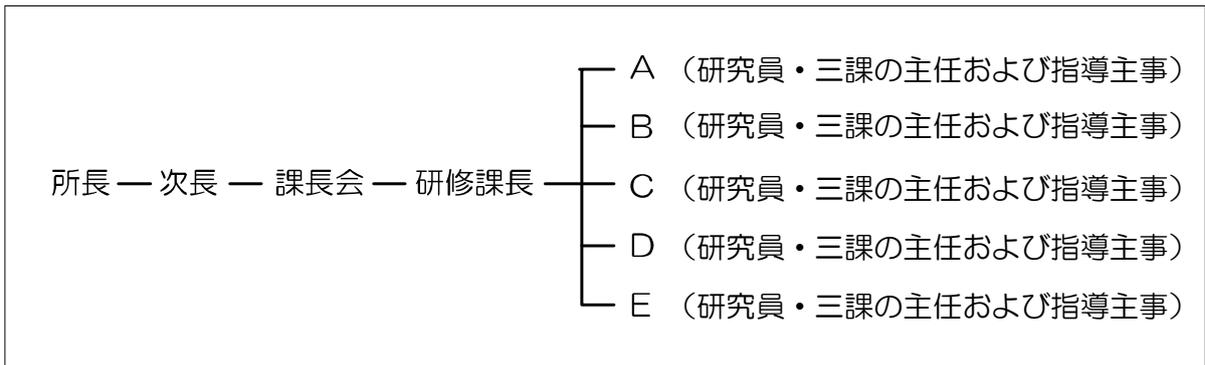
- ・市町教育委員会および保育所、幼稚園、小・中・高等学校との連携を密にした効率的な組織運営や適正な学校規模実現へ向けた支援
- ・人権尊重を基盤とした心の教育を推進し、学力、体力の更なる向上を図る学校教育への支援
- ・就学指導や教育相談業務等を通して、一人一人に合った適切な教育体制充実への支援
- ・教育現場のニーズに対応したより実践的な教職員研修の充実と、嶺南の教育課題に応える調査研究

私の属する研修課では、

- ① 教職員研修講座の企画運営
- ② 学校を訪問し校内研修を支援する研修支援
- ③ 教育課題の解決に向けた調査・研究
- ④ 教育図書・資料等の収集整理、情報化対応を主な業務としている。

この中で③の調査・研究を、これまでの研究員個人の研究から、**各課の所員で構成するチーム研究**へと変更した。チーム研究にすることで、各所員が業務遂行を通して持っている知識・情報を交流・共有し、嶺南の教育課題の解決に迫る、より実践的、効果的な調査・研究、成果の還元が可能になると考える。また、チームのメンバーである各所員も、調査・研究に関わることで、新たな知識・情報や、自分の実践を振り返る場を得ることになる。

今年度は、「学力分析」、「学校規模適正化」、「生徒指導」、「人権教育」、「情報教育」の5つの研究領域について、5チーム編成で臨んでいる。これまでのよ



月	研究内容	協議方法
4～5月	研究に関する情報収集, 研究テーマ・研究計画の作成	チーム毎のグループ協議①
5月中旬	研究計画の共有化【教職大学院】	全体交流・チーム毎の協議
6～8月	研究実践と振り返り(前半)	チーム毎のグループ協議②
9月	中間報告まとめ 中間報告【教職大学院】	全体交流・チーム毎の協議
10～11月	研究実践と振り返り(後半)	チーム毎のグループ協議③
12～1月	研究のまとめ 研究成果と課題の整理 研究紀要作成	チーム毎のグループ協議④
1月	所内発表会【教職大学院】	全体交流・チーム毎の協議
1～2月	研究発表資料作成 研究発表準備	チーム毎のグループ協議⑤

うに研究協力校を限定せず、チームを中心に業務を通して獲得した情報や文献・研究会等から得られた情報を交流し、研究員がまとめ、研究発表会、学校訪問(指導相談課業務)、研修支援(研修課業務)を通して成果を学校教育に還元する。よって、各チームは、年間を通じてグループ協議(チーム会議)を重ね、1年間の研究成果を研究発表会で報告する。

年度当初は、初めての試みに戸惑い、立ち止まることもあったが、チーム会議を開催し一旦動き始めると、次第に個人研究にはない視野の広がりが見えるというよさが出てきた。

例えば、調査・研究内容や還元方法への柔軟な発想が生まれ、チームの所員と一緒に学校を訪問し支援するという実践や、研修会等の企画段階からチームで行う実

践、3時から1時間程度で開催するミニ研修講座等の新たな動きが出てきた。また、こうした風通しのよさが調査・研究以外の業務にも影響を及ぼし、協働意識の向上や体制づくりのきっかけになっていると感じる。

例年行われている年3回の所内カンファレンスの場を活用し、各チームの研究の交流の機会としている。このときは、教職大学院の先生方にグループ協議に入っただけ、外部からの新たな視点をいただいている。5つのチーム研究になったことで、チーム外からの知識・情報をどのように取り入れるか、チーム会議の充実をどのように図っていくか等、運営上の課題も見えてきた。調査・研究内容と運営面の両方から現状をとらえ、教職大学院の先生方からの助言や運営会議(今年度は研究員以外の研修課員)での意見等を参考に、改善できることはすぐにでも取り入れて、今年度のチーム研究の充実と来年度に向けた体制づくりにつなげていきたい。

新しい挑戦には、不安や緊張を伴うが、研究員を中心に着実に新たな実践が積み重ねられている。研究成果の還元の具体例として、他課の学校訪問指導への参加は34回、研修支援は29回、事務所で開催している研修支援(ミニ研修講座)は3回である。

27年2月19日の研究発表会にも、大いに期待してほしい。



## インターンシップ/週間カンファレンス報告

### 教職専門性開発コース2年/丸岡南中学校 角谷 健大朗

早くも半年が経ち、夏休みをはさんで再び週間カンファレンス(木曜カンファレンス)が始まった。今回は10月の週間カンファレンスにおける学びを紹介していこうと思う。木曜カンファレンスでは主に、午前1)今週の学びの振り返り、2)主担当企画、午後3)公教育

改革の課題に基づくプロジェクト学習、4)授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究の4つの学びを行っている。

まず、今週の学びの振り返りでは、3~4人+大学院スタッフの小グループに分かれインターンシップ校で取

り組んでいる授業実践や生徒とのかかわりの悩みなど、校種・教科の枠組みを超えて話し合いを行った。今回は、体育祭や文化祭などの学校行事を通して、学級・学年・学校全体の雰囲気の変化や、生徒の活躍・トラブルの話が中心となり、生徒たちに良い意味で強烈な影響を与える学校行事という存在の大きさを改めて感じた。

次に、主担当企画である。これは、毎月インターン校ごとに担当が割り振られ、それぞれがテーマを決めて1ヶ月の学習を進めていく。今月の主担当は、中藤小学校と美浜中学校のインターン生5人で、テーマは「表現力アップ～人を引きつける教師になるために～」である。教師には、重要なポイントをおさえながら、相手を引きつけたり意欲を高めたりするパフォーマンスを行う、伝える相手によって臨機応変に表現を変えるなどの力が必要不可欠である。それは授業に限らず、学校生活のあらゆる場面において求められている。そこで、10月は表現力アップを目指して、1週目「インターン校の先生の姿をもとに、表現力について考える」、2週目「こんな場面どうする?」、3週目「子どもを引き込む初めの5分」、4週目「生徒と教師と表現力の考察」という

流れを通して、表現力とは何か、なぜ大切なのか、何につながるのかを探り、これからのインターンやその先に生かしていく。

午後の公教育改革の課題に基づくプロジェクト学習では、M1は大学生版PISA問題作成、M2は学校教育からテーマを絞り、ポスター作成を行う。この学習を通して、公教育の意味を探り、その理念について考えていく。

最後の授業改革・カリキュラムマネジメント実践事例研究では、校種・教科ごとに分かれ、そのグループでこれから行う授業実践の検討や、授業実践後の反省など、主に授業について学習している。授業実践の指導案をお互いに見せ合いながら検討・改善していくことで、より生徒たちの学びとなる授業に構成されるため、授業実践者の学びや助けともなり、非常に有意義な時間となっている。

このような学習を通して、教職大学院でしか学べないことが多々あるため、自分の財産となり、これからの取り組みに生かしていきたいと思う。

## 教職専門性開発コース1年／啓新高等学校 田村 朋久

2014年度の授業も早いもので半分が過ぎようとしている。現在私は啓新高等学校でインターンシップをさせていただいており、メンターの先生をはじめ他の先生方から多くのことを学ばせていただいている。

しかし2学期に入り、重大な思い違いをしていたことを痛感した。それは、生徒と教師の関係である。

2学期に入ってから1学期のような単発授業だけでなく、単元という一塊で授業を行うようになった。実際に授業に入る前でも文章として、参考資料としては「教師は生徒からも学ぶ」という言葉があるのは知っていた。そのような心構えもできているとも思っていた。しかし、実際に教壇に立って見るとどうだろうか。自分自身の技術力の低さも重い重なって非常に独善的でほとんど生徒の姿が見ることができていない非常に一方的な授業をしてしまった。

あまり良い考え方ではない(勿論そのような心持ちで臨んでいるという意味でもない)が、単発授業ならばその授業が終わってしまえば次の引継ぎをお願いすることもできる。しかしながら単元で持っているとその場しのぎは通用しない。どうあがいても責任の所在は自分にしかなく、単元を通して授業の内容と共に自分の思いを乗せて生徒たちに伝えなければならないということを強く感じた。

勿論このようなことは大学時代の授業や大学院でのカンファレンス、インターンシップの中でわかっているはずのことであったが、実際に教壇に立つまで心のどこかで我事として捉えることができておらず、長いスパンでの授業を見据えながら教壇に立ってやっと我事と捉え始めた。

その失敗した授業の後は、とにかくひたすら教師の

発言とそれに対する生徒の反応について意識するようになった。もちろんまだ完全にはできておらず見通しが非常に甘い上に、それに対する対応も十分とはお世辞にもいえないが、「この子は今、心が離れてしまっているな」「この子が学習しやすい授業ってどんなものだろうな」と言うように自分本位から少しずつ生徒の視点に動いていっているのではないかな、と感じる。

つまり、1学期までの私の中には教師→生徒という図式しかできておらず、教師←生徒というイメージがきちんとできていなかったのである。

これらは本来インターンシップに入る前段階で意識しておくべき点であり、周りの人に比べ1歩も2歩も遅いスタートのような形になってしまっているが、我事として再認識できた、という点を見れば非常に初歩的ながらも大切な1歩を踏んだのではないかと感じられる。

インターンの中ではクラスに入らせていただいたり、部活動を見させていただいたり、授業研究会や特進プロジェクトへの参加をさせていただいたり、非常に自分自身の成長の種になりうる場に身をおかせていただいている。それらは「あたりまえ」ではなく「貴重な時間」として自分の中に吸収していきたい。

まだまだ私自身に技術不足な点が非常に多く、反省の日々であり、これからも様々な問題にぶつかると思えるが、きちんと生徒と向き合って生徒の気持ちを理解し、少しずつでも歩みを進めていきたいと考える。

## 教職専門性開発コース2年／至民中学校 加藤 儀直

何か嫌なことがあったとき、何か失敗をしたときというのは、心がモヤモヤする。生徒指導、授業実践で何か引っかかることがあると、「あのときの指導は、よかったんだろうか」と考え込んでしまう。このやり方が最善という、一つの答えというのではないので、考えれば考えるほどわからなくなってくる。これだから、「教師」という仕事はやりがいのある職業なんだろうと感じる。

## 院生という立場の不安定さ

「院生」という立場は、子どもたちを評価する立場ではないので「いつも優しい、怒らない先生」でいることができるので、これまでは先生方の指導の仕方を間近で見て学ぶということがほとんどであった。いろいろなやり方がある、目の前の子どもの実態にあわせて“指導”をしていくことが大事という程度で考える事がやうであった。

今年に入って子どもたちの前で話をするようになってきた。褒めること、注意をすること、怒ること、本当に様々であるが、いつも思うのは「これでよかったのかな…」ということである。もしかすると、僕の中で何か揺らいでいるものがあるのかもしれない。もしかすると、「院生だから…」という気持ちが心の片隅にあるのかもしれない。いつでも逃げ道があるのは大事なことだけど、今まで、自分に甘すぎたと感じることが最近多くなってきた。

## 子どもの前で話をすることで…

子どもたちの前で何か話をするとき、僕は時々ものすごく辛くなる。今年の夏季集中講座のときに、これまでの実践について話をしたときに「加藤さんは、どう思ったの?」「本当に、子どもたちの姿を見て心を動かされたの?」と問われることがあって、子どもたちの前で

話をするとき「加藤!お前は、本当にそうやって思っているのか?」と自ら問いかけていることが多くなってきたからだ。子どもたちを育てるだけでなく、僕自身が大きく変わらないといけない、最近すごく感じるようになってきた。

## 心の底から信頼する…

9月27日。この日は、吹奏楽部のラストコンサートの日であり、3年生が中学校で楽器を演奏する最後の日でもあった。コンサートの前に行ったお別れ会では、数人の3年生から手紙をもらった。「今までありがとう」とどの子も書いているのだろうと思っていたが、手紙の文面はまったく違っていた。僕への言葉遣いがため口であったこと、今までいろんなことで迷惑をかけたことなど、謝罪の言葉ばかりであった。そして、手紙の最後には「最後の演奏では、『感謝』の気持ちを届けたい」と書かれていた。

子どもたちの姿を間近で見ていて、「感謝」「ありがとう」ということはいろんな形で表現している瞬間があった。大きなプロジェクトを立ち上げるときは、必ず先輩と後輩が一緒になって、お互いが考えていることをぶつけ合いながらいいものを作っていこうとする姿を見てきた。ここまで、後輩が自分の意見を言うことができるのは、①お互いがお互いを信頼し合っており、②先輩が後輩を守ってやるということをしてきたから。子どもたちからももらった手紙に、「吹部のことを思ってくれてるんだなあって思って、うれしかったです」「私の先生でいてくれてほんとうにありがとうございますございました」と書いてあるのを読んだときに、改めて「信頼」ということをずっと大事にしていきたいと思う。

## 夏の集中講座に参加して

## スクールリーダー養成コース2年／藤島高等学校 野尻 友佳子

教職大学院で実際に学ぶまで、そこではどのようなことが行われているのか、全く想像もつかなかったことを思い出します。そこで今回は、教職大学院の夏季集中講座なるものがどのようなものか、全く知らない人を想定して、レポートしてみようと思います。

- サイクル1 7月第4週に3日間連続
- サイクル2 7月第5週に3日間連続
- サイクル3 8月第4週に3日間連続

以上、合計9日間の出席が義務づけられます。各サイクルは、a(月～水)かb(木～土)のいずれかを選択できます。私の勤務校では夏期補習があるため、必然的にbサイクルを選ぶこととなります。また、勤務の都合上どうしても日程が合わない場合はa bをまたいで補充することも可能です。

さてサイクル1が始まりました。3日間で1冊の実践書を読み、レポートを作成することが課されます。最終日の午後には5名ほどの小グループ内でレポートの発表をし語り合います。読んだりレポートを作成

したりする場所は限定されておらず、図書館、院生室など自由です。私は、いつも合同カンファレンスが行われる「コラボレーションホール」でおこなうことにしています。昼ご飯時には、部屋にいる誰かと共に大学内の学食に行ったり、西福井駅周辺の店に繰り出したりして少し学生気分が味わえます。

読むべき実践書は11冊指定されているものの中から選びます。7月の合同カンファレンス時に先生方からアドバイスをいただき、私は『障碍児心理学ものがたり I 小さな秩序系の記録』（中野尚彦）を選びました。これまで特別支援教育の経験のない私にとって、知っておきたいことが多く書かれています。

ところで福井大学教職大学院には県外の現職教員の方も通っておられます。そのうちの東京の先生は、サイクル1は木～土、サイクル2は月～水にして、ずっと福井に宿泊し、日曜日は観光をする、とおっしゃっていました。福井の観光・・・どこをお勧めすればよかったですでしょうか。恐竜博物館には行く、とおっしゃっていましたが。

さて、サイクル2！これが難関です。「実践の架橋理論の検討」ということで、組織やマネジメントに関する理論書を読まねばならないからです。1年目のメンバーは必読書『コミュニティ・オブ・プラクティス』と格闘することになります。2年目は4冊の指定図書の中から選択できますが、多くは『学習する組織』（581ページ！3,780円！）を読みます。私を含め何人かは『なぜ人と組織は変わらないのか』を選びました。（でも『学習する組織』は必読書なので、9月になってから読み進めています。）どれも企業を念頭に置いた組織マネジメントの本であり、教育

に特化したものでなく、おまけに翻訳ものなので読みづらいのですが、先生方からのアドバイスもあり、またレポートにまとめる過程で整理ができるので、読み切れたという充実感が得られます。書かれている理論と自らの日々の実践を結びつけながら読んでいくと楽しいです。3日目には同じくレポートをもとに語り合います。

最後のサイクル3では、前期の実践を振り返りレポートを書きます。毎日小グループで方向性や進捗具合を確認し合う他は、ひたすら書きます。今年の私は8枚に仕上げました。始めはなかなか進まないのですが、これまでの記録を読み返し、俯瞰することで、構成が定まってきたらけっこうすすい進みます。「伝わりやすく書く」ということは練習あるのみ。書くことで日々の実践をふり振り返り今後に生かす、多忙な勤務の日々の中ではなかなかできにくいことですが、集中講座という枠を設けられたことでそれが可能になります。

また、集中講座には各サイクルごとにお楽しみ「特別ゼミ」が設けられています。今年は、風間寛司先生の「中学校数学科教師の「私」の力量形成と成長」、西川満先生の「算数・数学を楽しむ」、荒瀬克己先生の「学校改革について考える」という3講座をお聞きすることができました。他にも、様々な専門研究分野をお持ちの先生方が計33名もいらっしやり、小グループ内で身近に専門的なお話をうかがうことができ、高いモチベーションを維持し続けることのできる夏を過ごしました。

## スクールリーダー養成コース1年／美浜中学校 山口 有一

この夏、7/21～23、7/28～30、8/18～20の9日間、夏季集中講座に参加した。実践書や理論書を読み、レポートを作成してクロスセッションという流れの前半2サイクルは、普段の夏休みには行かない貴重な時間であった。読むことに関しては「なっとく」「なるほど」「ヒントになる」と感じる内容が多くあり、楽しく進められた。しかし、その内容をレポートにまとめる3日目は、時間の制限もあり非常に苦しい時間であった。特に2サイクル目の理論書に関しては、2日間何を読んでいたのだろうと思うくらいまとめられず、その場から逃げ出したいくらいである。なんとか乗り切ったこの夏季集中講座で思ったことを簡単にまとめてみた。

### Cycle 1「長期にわたる学習の展開とそれを支える教師の実践＜実践記録を読む＞」

実践記録『学びを拓く《探究するコミュニティ》第6巻 専門職として学び合う教師たち』を取り上げた。美浜中学校では教科の枠を越えた授業研究を行うようになってから7年目になる。今年も例年に習い継続して行っているが、そこで課題として感じていることの一つが教科の専門性の薄れである。授業公開を行い、授業研究グループで授業を観て事後研究を行うスタイルを取っているが、授業づくりの段階で授業内容の検討を教科部会で行うことは少なく、授業者個人で行っている場合がほとんどである。事後研究会では生徒の姿を見取り、その姿から話し合いをはじめめるが、教科の枠を越えた教員集団

での話し合いのため、教科の専門性がぼやけてしまっていると感じている。現在進行中の美浜中での実践で、このような課題を感じていたところに「専門職として学び合う教師たち」という題がつながり、このテキストを手取ることになった。テキストを読み進めていく中で、「生徒に本当につけたい力は何なのか」という問いと、「目の前にある目標としてペーパーテストで計られる力に直結する習得を軽視してよいのか」という問いの葛藤が自分の中で起こり始めた。そして、書かれた授業実践を読み進めていく中で、自分の心の迷いが小さくなってきた気がする。そっくりそのまままねすることはできないが、小さなことから実践し、「探究型の授業」の流れを作り、校内にこの流れを大きくしていくための仲間を増やしていきたいと思うようになった。その先に、教科の枠を越えた授業研究の本当の意味が表れてくるように思われる。

### Cycle 2 「実践のコミュニティ／学習する組織く実践の架橋理論の検討」

理論書として『コミュニティ・オブ・プラクティス』を読むことで、そこに書かれてある実践や、これから自分が行うだろう美浜中学校での実践の裏付けとなる理論を学んだ。読み進める中で、仕事上では、附属中の研究はまさにこのテキストが語る「実践コミュニティ」を形成して進められていると感じた。また、今現在ここで学んでいる福井大学教職大

学院では、まさにこのテキストに書かれている内容そのままのことが行われていると感じた。また、私自身のボランティアとしてかかわっている社会教育や地域活動での経験とリンクする部分がたくさんあり、様々な場面を思い起こした。そして、「学校の授業研究」を進めていくための十分なヒントにもなった。

### Cycle 3 「実践の展開・実践者の力量形成・コミュニティのプラクティスをとらえ直すく実践の事例研究とその方法」

4月から8月までの間に、初めての研究主任という立場で悩んだこと、実際に行動を起こしてきたこと、考えるだけに留まってしまっていたことなどを振り返り綴っていく作業であった。自分の行ってきたことを合同カンファレンスの度に話し、その都度同じグループのメンバーからアドバイスや貴重な意見をいただき、そこでの話し合いが自分の実践を振り返るだけでなくその後の実践にも少なからず影響していると感じた。また、夏季集中講座の実践書を読み、理論書を読み、自分を振り返る3サイクルを通して、2学期以降実践可能であろう取組のヒントがいくつか見つかった。

2学期以降、どれだけの実践ができるか分からないが、学校の同僚を巻き込みながら一つでも多くのことに取り組んでいきたい。

## 教職専門性開発コース2年／啓新高等学校 宮川 翔太

夏期集中講座には、Cycle 2 及びCycle 3 に変則的に連続6日間の日程で参加した。今年の夏は一人で考える時間が多くなっていて私であったが、先生方や他の院生との語り合いの時間の必要性を改めて感じた6日間となった。

Cycle 2 では、ショーンの『省察的实践とは何か』を選択し、読み進めていった。この本を選択した理由は、教職大学院のキーワードの一つである「省察」についてじっくり考え、これまでに私がやってきたことは正しかったのか、私がこれから進むべき方向性、やるべきことは何かを定めたいと思ったからだ。しかし、この本を読んでいくうちにこの考え方自体、「省察的实践」から離れたものとなっていたことに気付かされた。本書の言葉で言えば、「技術的合理性」の考え方であった。これまでの私を振り返ってみると、上手くできなければ、成果が出なければ意味がない、課題に対する正解を見つけなければならないと考え、なかなか前に進む一歩を踏み出せずにいた。実践を様々な視点で捉え、様々な方法、手段を試し、経過や結果を受け止め考察する

「省察的实践」に努め、実践に向かう姿勢を改めたいと思った。

Cycle 3 では、4月からの展開を振り返り、実践を捉えなおすことを試みた。記録と記憶をたどりながら出来事や実践を思い返していくものの、授業や生徒との関係づくりでの反省点ばかり目につき、生徒にとって、私自身にとってプラスになった点を見出せなかった悩み、苦しみの多かった4月から6月の展開をグループの中で語った。同じグループのメンバーの方々は、私の話をじっくりと聞いてくださり、悩み、苦しみに埋もれた私に、一人で考えていては辿り着かない視点や捉え方で多くのアドバイスをいただいた。これまでの展開を語り、道を示していただいたことで胸のつかえがとれ、新たな一歩を踏み出す気持ちを抱いた。

夏の6日間で得られたことを推進力に、9月からの実践に取り組んでいきたい。

夏の研究報告（国内編）北海道調査報告

# ESDそのものの 持続可能性について考える



福井大学教職大学院／特命准教授 前園 泰徳

北海道における私の調査目的は2つあった。1つは北海道大学と札幌市立大通高校におけるESD（持続発展教育）の特色や進展を明らかにすること、もう1つは、恵庭市におけるコミュニティスクールが住民主体で10年以上も持続している仕組みを明らかにすることである。その背景には、1) 福井大学にどのようにESDを浸透させていけば良いかを考えるうえで、大学として先行的にESDを実践している北海道大学から学びたいと考えていたことと、2) 文部科学省がESDを学校教育や地域に浸透を図ろうとするなかで、ESDの実践そのものが持続しない例が大変多いという現状を改善するヒントが欲しいという思いがあった。じっくり記せば膨大な量になってしまうため、ここでは要点のみを紹介する。

北海道大学において大学のESDに詳しい方にお話をお聞きすると、ESDは中央集権的な仕組みによって遂行されているのではなく、各研究者が独自に意識して行っている傾向が強いということであった。私は、その話に意外性を感じた。なぜなら、北大には、サステナビリティ学研究センターという組織が存在し、2006年より毎年サステナビリティ・ウィークという「持続可能な社会」の実現に寄与する研究と教育を推進させるための事業を主催してきたことから、大学をあげてトップダウン的に実施しているかと思っていたためである。現在、教員、学生にも「持続可能性」という言葉は自然に定着しつつあるという。しかし、ESDとは何か、そして、どのような実践を行うものなのかを体系的に学ぶような場は存在しないということである。大きな総合大学における意思決定や情報共有の難しさを感じた。



札幌市立大通高等学校は、ユネスコスクールに登録されており、今年11月のユネスコスクール世界大会

においても生徒が発表を行う予定である。大通高校では、一般的な高校と比較すると、社会とのつながりや世界の多文化理解を日常的に実感できるプログラムが大変多く、実践の多くをESDとして位置づけることができる。一方、ESD実践者としての意識やESDそのものの理解については、まだ教師間のレベル差が大きいという。ただし、大通高校の教師間の協働による負担軽減や、各教師の個性を活かしたプログラムなど、ESDを持続させるうえで重要な要素が見えてきた。



恵庭市のコミュニティスクールは、学校を核として地域住民や行政が絶妙の強度でつながった「組織の集合体」であるという印象を持った。話を聞かせていただいた全員が、「楽しいから続けられる」という言葉を発したことが大変印象的であった。実際には、住民の皆さんが楽しく自主性を持って活動を続けていけるために、行政職員が適切なアドバイスを与えて後ろから常に支えていることが、その秘訣であることも学べた。

持続可能な社会の構築は、今後人類全員が意識し、実践しなくては実現が難しいものである。暗中模索のなかで、今回の訪問では、ESDそのものの持続性を高めるうえでの重要なキーワードを得ることができた。「楽しいこと」、「様々な人とのネットワークがあること」、「負担の軽減」、「社会に働きかけること」、「成果を見える形にして発信すること」などである。今回学んだことを元に、私の実践や、福井大学におけるESDの浸透に向けて、ESDをいかに日常の中に落とし込めるか、そして、全体でどのように情報や意識を共有していけるかを考えていきたい。

夏の研究報告（国内編）北海道調査報告

## 「実践の形成と展開の持続可能性

## ～実践者の言葉からの示唆～

福井大学教職大学院／准教授 宮下 哲

「異なる実践なのに、実践者がみな、同様の言葉をつかって語っていた・・・」。札幌市内の宮越屋珈琲店で、松田淑子教授、前園泰徳特命准教授、杉山晋平特命助教、山崎智子特命助教（高等教育推進センター）と、その日1日の調査について所感を語っているときに、ふとそんな感慨が湧き上がってくる。

9月初旬、「高大連携」「ESD」「教師教育」「学校・家庭・地域の連携」・・・等様々な課題意識をもった5名が、北海道札幌市と恵庭市で調査研究を行った。恵庭市の「コミュニティスクール」\*の現場、札幌市立大通高等学校の実践、中等学校立ち上げに向かう市立札幌開成中等学校の取組を、各自の専門性をもとにとらえその所感を語り合い実践の意味を読み解く場が、私にとっては「学校・家庭・地域の連携」の形成や持続可能な展開を支えるものを探る場となった。

北海道恵庭市は、千歳市と札幌市の中間にあり、「コミュニティスクール」の実践を核としつつ特徴的な社会教育活動を展開している。恵庭市の実践は、「文部科学省が進めているコミュニティ・スクールとは異なり、学校を地域の生涯学習の拠点とした、地域住民主体の取組」を目指している。その取組について、かつてのできごとや現在起きていること、そのときの思考や行為を、実践者自身の声を通して聞き取るうちに、私は、「文科の政策との差」や「学校を拠点とする意味」「地域住民主体」という言葉の量感を得たように思った。その量感が、「学校・家庭・地域の

連携」の形成や持続可能な展開を支える要件として顕在化するにはさらに研究を進める必要があるが、その方向性は、北海道の実践者が語る印象的な言葉によって示唆されたと思う。

例えば「**境界を見る勇気が必要**」という言葉。異なる実践や組織の境界そのものを見ることは、境界線を引き直したり組み替えたり、あるいは消したりする勇気も必要だが、問いの共有には欠かせない。今回調査した実践には、その労を厭わず、人やアイデアを結び付ける重要な働きをしている複数の人々が必ずいた。

そのような人々は、「**十分に検討した計画はもつが、じっくりと腰を据えて語り合い、必要ならば白紙に戻すことも厭わない**」と実践に向かう。「互いの話にじっくりと耳を傾け、自分の考えの前提を保留しつつ、その前提自体を自由に話し合う。その結果、関係者の経験と思考の一番深いところまで表面化させる（ピーター・M・センゲ「学習する組織」）」ことを体験的にとらえ実践している姿に目を見張った。さらに、「**一枚岩というよりも、分かれた力をもちつつも、どのように一緒にやっていくかという知恵を共有**」し、実践を通して、「**あたかも、自分がフィクサーだと、何人もが言うようになる**」。「**そのように学習することが愉しくて実践が続いている**」という事実を積み重ねている・・・。

「今まで馴染んでいたことをあきらめ、権威に基づく報酬をあきらめ、挑戦しないで済むゆとりを実践の中で持つことをあきらめ、傷つかない安心をあきらめる。そのようにして獲得する新しい満足感、そのほとんどが発見による。そのようにして彼は、自己教育を継続的に進めていくのである（トナルト・A・ジョン『省察的实践とは何か』）」・・・こうした学習の存在が、実践の形成と持続可能性を考えるうえで不可欠ではないだろうかということを、強く心に刻んだ調査だった。

※ 恵庭市では、「コミュニティスクール」と表記し、「コミュニティ」と「スクール」の間に「・」をつけない。



夏の研究報告（国内編）北海道調査報告

## 市立札幌大通高校と 市立札幌開成中等教育学校を訪問して

教育地域科学部／教授 松田 淑子

この度の札幌研究調査でも、市立高校2校、市立札幌大通高校と市立札幌開成高校（来年度より中等教育学校）を訪問させて頂いた。両校とは、杉山晋平先生の長年の研究や教育におけるつながりにより、私も訪問を重ねさせて頂いている。一方、両校からもラウンドテーブル、高大連携ラウンドテーブルに継続してご参加頂いており、双方向のつながりがある。この度は、福井大学から5名の教員が訪問させて頂いた。

8校ある札幌市立高校群は、その存在意義の問い直しから教育改革を進め、10年が経った。その中でもこの2校の改革は、極めて特徴的であり精力的である。

今回は特に、大通高校では初の教員ミニラウンドテーブルへの挑戦、開成高校では新校舎見学と言う、それぞれ大変貴重な経験をさせて頂いた。

定時制・単位制・三部制の大通高校は、“社会に近い、開かれた高校”をキャッチコピーとし、平成20年度に開校した最も新しい札幌市立高校である。複数の教科がつながるミツバチプロジェクトや、公共の電波を介して地域とつながる生徒会外局メディア局によるラジオ番組、IRODORI大通つうしん等、様々な授業や特別活動等が展開されている。本年11月開催のユネスコスクール世界大会 高校生フォーラムにおいても、ニューカマーの生徒たちによる、アイヌと札幌のまちに関する報告が行われる予定である。

さて、その大通高校で、今年は遂に短時間小規模ながらも、ラウンドテーブルを実施することができた。



平野淳也教諭のリーダーシップの下、管理職の先生方もご参加頂き、20数名が小グループを作り、教師として、そして大通高校の教師として、大切にしてきたことや、現在取り組んでいる課題と今後の展望などを語り合った。福井大学教員のみならず、大通高校の先生方同士にとっても、同僚の背景や現在進行形の取り組みに対する思いなどについて、初めて聞くことが多く、自分の経験や取り組みとすりあわせながら皆で語

り合った。ミニラウンドテーブルへの挑戦も含め、大通高校の先生方の価値観や取り組みは、定時制高校のみならず、普通科高校の未来を先導しているように思えた。

開成中等教育学校では、来年度の開校を前に、既に完成した教科センター方式の新校舎への引っ越しも終え、在校生である開成高校の生徒たちも校舎にすっかり馴染んでいた。新校舎拝見とともに、次年度入学希望の小学6年生、中学3年生、及び保護者への説明会でのプレゼンテーションを一足先に伺わせて頂く幸運にも恵まれた。学校教育目標は「わたし、アナタ、minna そのすがたがうれしい」。6年間を通して、課題探究的な学びに向き合うため、また異年齢集団による学び合いを生かすため、教科センター方式の校舎が採用されている。相沢克明中等教育学校長、広川雅之中等教育学校担当係長の学校づくりの確かな方向性や熱意あふれるお姿から、来年度以降、間違いなく台風の目になると確信できる学校である。



この度の札幌研究調査によって、未来の高校の理想像をリアルに描くことができました。そして、志を共有できる方々とは、距離的には遠く離れていても、とても近い・・・そんなことを実感する3日間でした。両校の先生方を始め、札幌でお世話になった皆様にご場を借りて心より御礼申し上げます。

## 伊藤ゆかり元院生 第63回読売教育賞最優秀賞受賞

この度、福井大学教職大学院修了生（平成25年3月修了）の伊藤ゆかり教諭（嶺南東特別支援学校）が、わが国最高の教育賞との評価を得ている「読売教育賞」の特別支援教育部門において最優秀賞を受賞されました。授賞式では高円宮妃久子殿下の御臨席の中、記念の盾が贈られ論文概要について報告がなされました。このことは、本大学院にとっても大変誇らしいことでもあります。ついては、同教諭が受賞された論文の要点を以下に紹介いたします。



### 重度重複障害児のQOL（生活の質）の向上がもたらしたもの ～教育と医療の役割分担と医療的視点を入れた学びの場の構築～

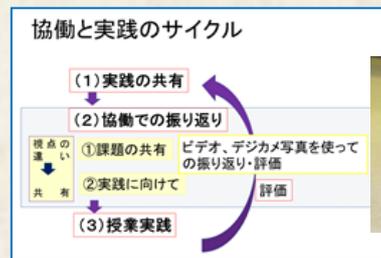
嶺南東特別支援学校／教諭 伊藤ゆかり

私は、障害のある子どもや保護者の自己肯定感の向上と積極的な社会参加という教育課題に常日頃から悩み、一教師としての限界を感じていた。日々の自身の実践が、障害のある生徒の社会参加に有機的に繋がるのかどうか不安があったため、福井市の平谷クリニックの研修会で勉強を続けた。そこでは本人や保護者への支援、関係者との連携を「専門的に長期的かつ組織的に」行っており、障害のある子どもの教育にこそ、医療の専門性を取り入れる有効性と専門分野を解いた連携の必要性があることに気付かされた。

そんな折、文部科学省の「理学療法士（PT）・作業療法士（OT）・言語療法士（ST）の活用法、指導方法等の改善に関する実践研究事業」が本校で推進されたのを契機に、「教育に医療的な視点を取り入れた学びの場の構築」の研究実践を目指すこととなった。

教育の中に医療的な視点を取り入れるために生徒Aを抽出した。Aには課題が多くあったが、特に、移動手段が四つん這いで、指や手を上手に使うことができず、始終指吸いをしていたことに着目して、研究課題を①歩行の動きを導き出す②手や指先の動きを導き出す③指吸いをなくすという3つに限定した。実践の過程で、教育と医療の視点の違いが明確になれば「擦りあわせ」に時間をかけ、作業療法士（以下OT）のアドバイスは自立活動の教材の改良という形で取り入れた。時間が経つと、以下のような「協働と実践のサイクル」が自ずと出来上がった。

- (1) 実践の共有  
OTが、学校でのAの様子や教師の指導を注意深く見守る。
- (2) 協働での振り返り  
①映像を見てAの様子や指導法について双方で話し合い、課題を共有。視点の違いを感じたときには、納得するまで話し合う。  
②医療的視点のアドバイスを教材に取り入れ改良することで、次の実践に繋げる。
- (3) 授業実践  
アドバイスを受け改良した教材を使用し授業実践。双方で評価する。



2か月後には、再び(1)に戻るという同じ流れを繰り返していったところ、四つん這いしかできなかったAが2年半後には独歩できるようになるなど顕著な成長があった。成長を経験値で評価する教師に対して、数値で評価するOTの手法は極めて新鮮であることを実感した瞬間であった。

こうした実践をとおして、生徒Aは自力でできる事が増え、QOL（生活の質）も大きく向上した。それにともない当然のことながら、わが子の成長を見守る保護者も社会参加に前向きになった。

今回の実践のキーコンセプトであった「専門分野の違う者同士が協働・連携すること」「実践を省察すること」は、まさに福井大学教職大学院の院生時代に学修したことであり、その学びが結実した成果であった省察している。

#### 後日談

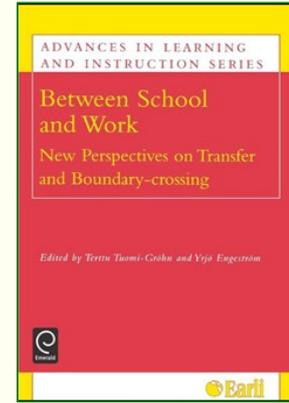
「今後は、今回の受賞を励みに、医療と教育の連携をテーマにした特別支援教育の実践研究を一層積極的に継続していきたいと考えています。」とのことであります。

# 書評

## Between School and Work: New Perspectives on Transfer and Boundary-crossing

Terttu Tuomi-Gröhn & Yrjö Engeström (編)

2003年, Emerald Group Publishing Limited  
ISBN: 978-0-08-044296-9



本書は、COST (European Cooperation in Science and Technology) において“Flexibility, Transferability, Mobility as Targets of Vocational Education and Training”というテーマに取り組んだワーキンググループの研究成果がまとめられた論文集である。全体として15章にわたる論文が3部に分かれて構成されており、著者にはユーリア・エンゲストロム氏やキング・ビーチ氏他、多くのヨーロッパの研究者が名前を連ねている。

書名にもある学習の「転移 (transfer)」という概念に対する批判的な検討の歴史は古い。また、特に20世紀後半以降、日常的認知研究の知見に基づく状況的学習論、ヴィゴツキーの再評価と文化歴史的活動理論の発展の中で人間の学習営為を理解する新たな枠組みも提起されてきている。しかしながら、私たちの生活を取り囲む既存の諸制度に、あるいは私たちが学習を語る中に、今なおこの「転移」と呼ばれる概念がどこか巧妙に、根強く紛れこんでいるように感じる。

特にそれが強く感じられるのは、「学校教育と職場」、あるいは、「学ぶことと働くこと」との関わりがとりあげられる場面ではないだろうか。

学校教育を通じて学ばれたことが、職場での生活にどのように活かされていくのか。職場で活かされる広範な知識・スキルが首尾よく習得される学校教育とはどのようなものか。このような問い立ての背後に引き摺られているのが、「いったん学んだ知識・スキルは、後に出会う新たな課題に適用できる」といった素朴な「転移」の概念である。他方で、私たちはいったん学んだ知識・スキルといえども、それが別の状況でそのまま同じように適用されることは滅多にないという現実にも、どこかで薄々気づいている。「それは机上の空論だ」といった類いの表現が用いられる場面では、何かしらそのような直感があらわれていることも少なくはないだろう。

では、学校教育における経験と職場での経験、学ぶという経験と働くという経験は、私たちの生活の中で分断された、全く連続性をもたないものなのだろうか。否、私たちはまた、どこかで気づいているのではないだろうか。複数の異なるコミュニティ、異なる活動を通じて得られた経験同士を意識して結びつけたり、戦略的に分け隔てたり、時にその関係性に目を背けたり、また結びつけ直そうと悩み苦労しながら、何者かになっていく(きた)ということ。

本書が光を当てるのは、「学校教育と職場」、あるいは「学ぶことと働くこと」を行き来しながら生まれ、経験されていく私たちの学習のそのような複雑で多元的な側面である。著者たち間で共有されているのは、何かしら完全な知識・スキルが別の状況に転移していくという視点ではなく、むしろ、異なるコミュニティ、組織、活動の「境界を横断する (boundary-crossing)」という視点から学習を理解しようとする姿勢である。

第1部では、従来は転移と呼ばれてきた現象を研究していく理論的基盤となるこの境界横断という視点について議論が重ねられている。特に、第3章のキング・ビーチ論文では、彼のさまざまな事例研究で得られた知見を総括しながら、「変化していくのは学習者個人だけではなく、個人が関与する複数のコミュニティと社会的活動もまた継起的に変化を遂げていく」こと、そして、両者の相互的な変化の関係性を「移行 (transition)」として捉えていく視点が提起されている。

第2部では職業教育における学習と転移の問題、第3部は職場における学習をテーマとして、多様な教育現場や職場におけるフィールドリサーチから得られたデータを上述の視点から分析した実証研究論文が続く。但し、各著者の依って立つ理論的背景が、構成主義、状況論・社会文化的アプローチ、活動理論といったように幅があること、そして、個人とコミュニティ・活動との相互的な関係性に焦点を当てると言ってもその記述の重きが前者・後者のいずれに置かれているかで分析単位に差異があることには留意を要する。それゆえ、一見すると散漫な印象を与えてしまいかねない本書の構成であるが、むしろ、先述の「学ぶことと働くこと」を行き来しながら経験される学習の複雑で多元的な側面が本書全体を通じて表現されていると受け止めたい。なお、序章には論文間関係を示すガイドが示されており、終章では収録された多様な実証研究を貫く研究課題も丁寧に整理されている。

福井大学教職大学院の「学校拠点方式」に基づく教師教育実践の積み重ねに照らしながら、大学と現場を行き来しながら院生の方々に経験されていく学習とはどのようなものなのか、そこにかかわる私たちスタッフの成長をどのように捉えることができるのかといった問いを深め、各学校の具体的な取り組みの展開の中にそれを位置づけてふりかえる上で示唆が得られる一冊である。

(杉山 晋平)



## シンポジスト



**アンディ・ハーグリーブス 氏**  
 Dr. Andy Hargreaves ポストン・カレッジ教授  
 教育社会学。博士（教育学）。  
 主な著書に『知識社会の学校と教師』（金子書房）、“Professional Capital” (Routledge) などがある。教師の同僚性、専門性、リーダーシップ研究の第一人者で、教育改革のフィールドで国際的に活躍している。



**秋田 喜代美 氏**  
 Dr. Kiyomi Akita 東京大学大学院教授  
 教育心理学、学校教育学。博士（教育学）。  
 主な著書に『子どもを育む授業づくり』（岩波書店）、『学びの心理学』（左右社）などがある。国内外の数多くの学校に25年以上かかわり、各学校の授業参観や校内研修への支援を通して授業研究と学習過程研究を先導している。

# 実践研究 福井ラウンドテーブル SESSION 0 シンポジウム

## 知識社会の教師の資本 Teacher Professional Capital in Knowledge Society

## コーディネーター



**木村 優 氏**  
 Dr. Yuu Kimura 福井大学教職大学院准教授  
 教育方法学、教育心理学。博士（教育学）。  
 主な著書に『情動的実践としての教師の専門性』（風間書房）、『教師の実践と成長を支える情動』（左右社、印刷中）などがある。学校と教師との協働実践研究に基づき、教師の専門性における情動の布置を探究している。

**日時** 平成27年 **2/28** (土) 10:30 – 12:00

**場所** 福井大学文京キャンパス  
総合研究棟V (教育系1号館) 大1 講義室

**入場** **無料** 平成26年11月より事前申込受付開始  
申込は <http://www.fu-edu.net> にアクセス

2/27(金)

Pre-SESSION

2/28(土)

SESSION 0	10:30-12:00	知識社会の教師の資本 Symposium
SESSION I	12:50-13:50	実践に学び合う広場 Knowledge fair
SESSION II	14:00-15:40	課題の提起 Symposiums
SESSION III	15:50-17:30	テーマ別の話し合い Forums

3/1(日)

SESSION IV 8:20-14:00 ラウンドテーブル Round table cross sessions



福井大学教育地域科学部附属特別支援学校  
平成26年度 **公開研究会のご案内**

**11.28** 金 9:40-16:30 【参加費無料】  
開場：福井大学教育地域科学部附属特別支援学校（福井市八ツ島町1字3番地）

**研究テーマ**  
『学校・地域・家庭のつながりの中で育つ  
～一人一人が活動と参加の質を高める～』（3年次）

**日程**

9:40	10:00	11:30	20:00	13:00	13:40	15:50	16:30
受付	授業公開 (自由参加)	校舎見学 授業振りの振り返り	昼食	全体会 校長挨拶 研究概要 全体和音	移動	分科 分科会研究概要説明 研究協議 意見交換 など	

**お問い合わせ** 福井大学教育地域科学部附属特別支援学校 担当：常廣和美  
〒910-0065 福井市八ツ島町1字3番地 TEL：0776-22-6781  
e-mail：f-tokusui@f-edu.u-fukui.ac.jp

福井大学教育地域科学部附属小学校  
第40回 **教育研究集会のご案内**

**12.5** 金 9:00-16:30  
開場：福井大学教育地域科学部附属小学校（福井市二の宮4丁目45-1）

**研究テーマ**  
「聴き合い、つながり合って、  
学びを深める授業をつくる」（1年次）

**内容**  
全体会、公開授業、分科会、講演会

講師：昭和女子大学大学院 教授 押谷 由夫 先生

**お問い合わせ** 福井大学教育地域科学部附属小学校  
〒910-0015 福井市二の宮4丁目45-1 TEL：0776-22-6891

21世紀の知識基盤社会に生きる力を育て  
子どもたちの生活と成長を支える  
教師の実践力を高めるために

**OPEN Petit!**  
**CAMPUS**

開催日：7月12日(土)・10月18日(土)・  
10月25日(土)・11月15日(土)・11月22日(土)  
時間：9:20～14:20  
会場：福井大学教育地域科学部1号館6階コラボレーションホール

**教職大学院説明会開催致します!**

- 大阪会場** 梅田センタービル（大阪市北区中崎西2丁目4番12号）  
8月2日(土) 13:30～16:00 1階会議室G  
11月8日(土) 13:30～16:00 1階会議室F
- 京都会場** メルパルク京都（京都市下京区東洞院通七条下ル東塩小路町676番13）  
8月3日(日) 13:30～16:00 6階会議室4【桃】  
11月8日(土) 13:30～16:00 5階会議室2【桂】
- 名古屋会場** Time Office名駅（名古屋市中村区名駅2丁目4番12号アストラレー名駅3階）  
8月23日(土) 13:30～16:00 3階 TimeB  
11月9日(日) 13:30～16:00 3階 TimeB
- 東京会場** FUKURACIA東京ステーション（東京都千代田区大手町2-6-1朝日生命大手町ビル5階）  
11月16日(日) 10:00～12:00 6階会議室E
- 福井会場** 福井大学文京キャンパス（福井市文京3丁目9-1）  
12月20日(土) 15:00～ 教育地域科学部1号館6階  
コラボレーションホール

福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻 ■ お問い合わせ・申し込み方法  
氏名・所属・連絡先メールアドレス・参加希望日を明記の上、福井大学教職大学院  
dpdtfukui@yahoo.co.jp までメールにてお申し込みください。  
なお、メールの件名には「オープンキャンパス参加」と明記してください。

**Schedule**

10/18 sat 合同カンファレンス・A日程

10/25 sat 合同カンファレンス・B日程

【編集後記】

今年のノーベル平和賞は、パキスタン出身のマララ・ユスフザイさんが受賞しました。昨年、ブット元首相のショールを纏って行った国連演説で、「すべての子どもの明るい未来のため、学校と教育を望む。」と平和を実現するために公教育を切望し、「一人の子ども、一人の先生、一冊の本、一本のペンが世界を変えられる。」と訴えました。この夏の集中講座や研究活動等を通じて、学び続ける姿、思いや願いを託すことができ、幸甚です。（風間寛司）

教職大学院Newsletter **No.66**

2014.10.18発行

2014.10.18印刷

編集・発行・印刷  
福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻  
教職大学院Newsletter 編集委員会  
〒910-8507 福井市文京3-9-1  
dpdtfukui@yahoo.co.jp